

志賀理江子、メルツバウ×バラージ・パンディ(ハンガリー)、  
リシャル・ピナス(フランス)

## 『メルツバウ、バラージ・パンディ、 リシャル・ピナス with 志賀理江子「Bipolar」』 第2回報告書〈劇場でのリハーサル〉

森山直人

### 映像が劇場にやってくる

第1回報告書で述べたような準備段階を経て、10月6日・7日の2日間、公演会場となる京都芸術劇場・春秋座で、本番前の最終チェックが行われた。私は両日とも作業過程に、主に客席から立ち会うことができた。

10月6日。この日は午前中から照明スタッフによる仕込み作業が行われている。16時以降に劇場に入ると、春秋座1階席鳥屋口の前にはすでに映像操作用の特設ブースが設置され、志賀理江子氏と佐藤貴宏氏(映像制作・編集技術サポート)が手元のモニターを前に作業をしている。照明の仕込みは16時50分頃に終了し、17時から映像だけのランスルーが行われた。

本番と同じスクリーンに、宮城のアトリエで見た映像と同じ素材が、実際に投影されると、迫力はやはり圧倒的で、春秋座の大空間にまったく負けていない。幅22mの巨大スクリーンいっぱいには投影される赤色に加工された、息をのむような波の映像から始まり、続いて何人もの人たちが、防潮堤の上を何かに急ぎ立てられるように歩行する映像が連なっていく。だが、宮城で見た時とくらべると、微妙な違いも感じられる。宮城のアトリエにはなかった劇場照明がスクリーンに干渉し、映像のコントラストが幾分緩んでしまっているようにも感じられた。映像と照明という異なる「光」相互のバランスの難しさは、つとに指摘されるところだが、この作品では「映像」の成否が鍵を握るので、一層重要なポイントになるだろう。

約1時間で通しが終了した後、舞台監督をはじめとする劇場スタッフと映像チームの打ち合わせ。志賀氏は、「とにかく最初の15分は、さまざまな速度でなされる人々の歩行の映像をしっかり見せたい」旨をスタッフに伝達。同時に、約1時間のなかで一度ずつ出てくる、ホワイトアウトとブラックアウトが、映像の流れの大きな区切りとなることが、劇場スタッフにも共有されていく。この間、企画者サイドの代表として、塚原氏はつねに映像操作ブースの近くにおいて、志賀氏と細かなやり取りをしていた。



映像操作ブースでチェック作業をする志賀理江子氏(手前)と佐藤貴宏氏

### 音楽と映像を合わせてみる

10月7日。いよいよミュージシャンが小屋入りする。それに先立って、15時から映像だけのランスルーが再度行われた。一見して、昨日とはまったく印象が異なっていて驚く。今回の映像を特徴づける光の赤さと青さ、表層のザラザラした質感や、背後の黒い闇の深い奥行きなどが、圧倒的に鮮明に迫ってくる。ミュージシャン用の照明やフットライトの光と映像の光のエッジが、綿密な技術的調整を経て、映像スクリーンときれいに棲み分けられ、舞台全体がとても鮮やかに見える。ランスルーの終了後に、志賀氏に確認すると、「昨日は流しながらいろいろ変化させてみた手元のブライトネスを、今日はなるべく動かさないようにした」とのこと。本番に向けて、志賀氏自身もいろいろな可能性を試している。

その間、15時20分、リシャル・ピナス氏(ギター)が舞台上に姿を見せ、16時15分までに、バラージ・パンディ氏(ドラム)、秋田昌美氏の3人が、舞台上に全員揃う。しばらくは楽器や機材のチェックに余念がない。今回の作品で重要なのは、「ミュージシャン用の映像モニター」の位置である。演奏中、それぞれのミュージシャンは基本的に前方を向いているため、背後の巨大スクリーンを直接見ることはできない。そのため、演奏中は舞台床のモニターを通じて、いまだどんな映像が背後に流れているのかを確認することになる。各ミュージシャンの周囲には演奏機材やスピーカーなどが所狭しと並んでおり、最適の位置を、劇場スタッフと細かく打ち合わせながら探っていく。バラージ氏は音響エンジニアと、バスドラ、スネア……などと、ひとつひとつのドラムの音量レベルをチェックしていた。

16時40分、いよいよ音出しが始まっていく。特設スピーカーから聞こえてくるサウンドは、ものすごい爆音だが、とてもクリアだ。それに合わせて、志賀氏がいろいろな映像素材を試し打ちしつつ、時折客席中央に歩み寄って音と映像のバランスをチェックしている。17時10分、塚原氏がマイクで、映像のスタートとエンディング等のきっかけを共有したいとミュージシャンに呼びかけ、次いで、志賀氏が英語で映像のおおまかな流れを説明する。とにかく映像のパンチとサウンドのパンチが、予想した通り、見事に拮抗し合っている!18時頃、すべての打ち合わせが終了。

いわゆる「ゲネプロ」はついに行われなかった。後日、塚原氏にその点について聞くと、ゲネプロを行うべきかどうか、実はかなり迷ったのだという。ミュージシャン相互の関係性は、即興セッションのベテラン同士なのでほぼ心配はない。問題は、今回、「第四の即興ミュージシャン」として加わる志賀氏が、はじめての体験であるということ。志賀氏のことを考える



ミュージシャンたちが揃って行われたリハーサル風景

とゲネプロはあったほうがよい。だが、ゲネプロをするカルチャーを持たない即興ミュージシャンへの無理な要請は、本番のモチベーションにも影響しかねない。「ゲネプロなし」で行く、という決断は一種の賭けだったかもしれない。だが、考えてみれば、「一期一会」を重視する能は、本番前日に簡単な「申し合わせ」しか行わない。その意味で、直前の最終準備は、どこか日本の伝統芸能にも似ていた。



音楽と映像がはじめて重なり合う



舞台のほぼ全景